

二〇世紀初頭ブハラの断食月

サドリッディーン・アイニーの『回想録』より

島田志津夫／訳

訳者まえがき

ここに訳出したのは、「ソヴィエト・タジク文学の父」といわれるサドリッディーン・アイニー（一八七八—一九五四）の『回想録』からの一節である。

この作品の著者アイニーは、中央アジアの古都ブハラ（現在ウズベキスタン領近郊の農村に生まれ、ブハラのマドラサ（イスラームの高等学院）でイスラームの伝統的な諸学問を学んだ。その後、彼は一九〇〇年代以降せまりくる変革の流れの中でジャディード運動と呼ばれる改革運動に身を投じ、ブハラの革命勢力の形成にも重要な役割をはたすこととなった。革命後は、当初おもにジャーナリズムの分野で活躍し、新聞や雑誌の紙上に多くの論説を発表した。とくに、一九二四年のタジキスタン成立以降、彼はそれまで明確には存在しなかった「タジク語」「タジク文学」という新しい概念を掲げ、言語や文学にかんする著作の執筆活動をおとして新しい民族意識、国民意識の形成に貢献したのである。一九二四—二五年には、最初の小説作品『アーディーナ』を新聞紙上に連載し、本格的な作家活動を開始した。その後、『ダーフンダ』（一九三〇出版）、『奴隸』（一九三五出版）、『高利貸の死』（一九三九出版）、『孤児』（一九四〇出版）など一連の作品を発表し、ソヴィエト・タジキスタンを代表する作家としての地位を不動のものにした。

またアイニーは、フィルダウスィーやルードギー、サアディーなど古典詩人にかんする文学研究、および中央アジアの歴史についての著作も多く

残している。とくに『ブハラ革命史資料』（一九二〇—二二執筆、一九二六出版）と『ブハラのマンギト朝アミールたちの歴史』（一九二〇—二二執筆、一九二三出版）の二作品は、ブハラの改革運動およびそれに連なる革命運動の歴史を知る上で重要な資料として、高く評価されるべきものである。フィトラト（一八八六—一九三八）やファイズッラ・ホジャエフ（一八九六—一九三八）などアイニーとともにブハラの改革運動にたずさわった者たちのほとんどがスターリン時代に粛清の犠牲となり、彼らの著作が以後長らく閲覧禁止になったことを考えれば、アイニーのこれらの著作の持つ意義が明らかになるであろう。

これらの著作とともにアイニーの作品の中でも重要な位置を占めるのは、彼の最大にして最後の著作となった『回想録』である。その執筆は、一九四六年に始まり一九五四年までの八年間にわたったが、アイニーの死去にともない未完のままに終わった。とはいえ、四部からなるこの著作は合計一〇〇〇ページ以上（全集版）にもおよぶ大作で、ここではアイニーの回想をおして一九世紀末から二〇世紀初頭におけるブハラの社会状況が克明に描き出されている。

その序文によれば、当初アイニーは一九一七年の一月革命の時期までの回想を記そうと考えていたようであるが、結局、この著作にはアイニー自身の軌跡については一八八〇年代から一九〇三年頃までの回想しか記されていない。しかし、そこではアイニーが生まれた農村の生活の

様子、プハラのマドラサの様子（授業形態、カリキュラムなど）、プハラ市民の娯楽、様々な階層のプハラ市民の生活、職人や商人たちの状況、プハラの文人たちの活動状況などについて詳細な記述がなされているのである。

今回はそのような記述の中から、プハラにおける断食月の様子について書かれた一節を訳出してみた（「プハラのラマザン月と『夜のバザール』」）。プハラのラマザン月の場所取り合戦「回想録」第四部。当時プハラは、ロシア帝国の保護国となりながらも（一八七三年）、アミールと呼ばれる君主が支配する独立国であった。古くから中央アジアにおけるイスラームの学問研究の中心地として知られ、宗教者の影響力が強く、保守的な地域でもあった。人々の生活のあらゆる面でシャリーア（イスラーム法）が規範となっていたことも、本文に見えたとおりである。イスラーム社会ではシャリーアが生活の規範であることは当然であったといえなくもないが、二〇世紀初頭のプハラに於いてこれほど詳しく具体的な記述は他に類を見ない。訳者があえて拙訳を試みた理由もここににある。

翻訳にあたっては、「アイニー全集」第七巻所収のタジク語テキストを底本とした。本文中の○内は原著者によるもの、□内は訳者による補足である。

注

1 アイニーは、タジク語（中央アジアのペルシア語）で作品を発表すると同時に、ほとんどの文学作品を自身の翻訳によるウズベク語でも発表している。これは、基本的に住民の母語はタジク語でありながら、そのほとんどがウズベク語にも堪能であるというプハラの言語状況、バイリンガリズムを反映するものである。ちなみに、アイニーはロシア語をほとんど知らなかった。

2 アイニーのタジク語による著作の大部分は、一九五八年から七六年にかけて出版された『アイニー全集』（全二巻）に収録されている。Ayni

S., *Kulliyat, jildi 1-12, Dushanbe, 1958-76.*

3 アイニーも粛清の恐怖とは無縁であったわけではない。一九三七—三八年頃には「人民の敵」として告発され、一時アイニーの著作も閲覧禁止となった。彼が粛清をまぬがれたのは、まったくの幸運であったといわなければならぬ。Beška J., "Literature and men of letters in Tajikistan", *Journal of Turkish studies*, 18, 1994, p. 26.

4 第一部・二部は一九四八—四九年に誌上連載され、四九年単行本出版。第三部（一九一五〇年連載）と第四部（五三—五四年連載）は、五四年に単行本の形で出版された。

5 Ayni S., *Yaddashihā, Kulliyat, jildi 6, Dushanbe, 1962, p. 8.*

6 Ayni S., "Māhi Ramazāni Bukhārā va bāzāri shab" "Tangī jānamāzpakunī dar Ramazāni Bukhārā", *Yaddashihā, Kulliyat, jildi 7, Dushanbe, 1962, pp. 481-494.* 「回想録」は、発表直後にセルゲイ・ポロディンによってロシア語に翻訳され、そのロシア語訳を介して各国語に翻訳された。以下のような邦訳もある。アイニー「プハラ——ある革命芸術家の回想」（米内哲雄訳）未来社、一九七三年。しかし、ポロディン訳には意図的な改ざんや原文削除が多く見られ、信頼のおける翻訳とはいえない。また、邦訳には「回想録」の前半第一部・二部しか含まれていない。

プハラのラマザン月と「夜のバザール」

かつてプハラのラマザン月¹は、とても複雑な一ヶ月であった。この月は、一方では宗教上の伝統により「神聖な月」、信仰の月、神の許しを求める月とされていた。この習いにもとづき、

ムスリムたちは断食をおこない、定めの五回の礼拝に加えて毎晩タラーヴィーフの礼拝をおこなった。タラーヴィーフの礼拝の際は、多くのモスクで夜を徹してコーランを最初から最後まで朗誦し、ハーンカーではシャイフがムリードたちとともにこの月の最後の一〇日間を御籠りをしてすごした。

また、もう一方でこの月は、生活に何不足ない人々、仕事もなく街をぶらついている人々にとつては無為の月、飽食の月、放蕩の月、博打の月、けんかの月と思われていた。

驚くべきことは、当時、後者のようなばかげた行いの多くが前者のような信仰深い行いの際にもなされていたということである。これを端的に言おうとすれば、「ブハラのリマザン月は、偽善の月、騒乱の月、病んだ苦痛の月であった」と言わなければならない。

この月の始まりも、宗教者のあからさまな偽善から始まった。シャリーアによれば、ラマザン月の開始と終了は、天文学的な計算から算定されるのを良しとせず、ムスリムたちが目視によって新月を確認することから決定されなければならないとされている。すべてのムスリムが新月を確認することは不可能なので、二人かそれ以上の「信仰深く、一生の間に嘘をついたことのない」ムスリムが新月を確認し、カーズイー「イスラーム法裁判官」の目前で新月を見たことを証言しなければならぬ。カーズイーが彼らの証言をシャリーアにかなったものだと判断すれば、カーズイーは「明日からラマザンである」、あるいは「明日はイードである」と正式に発表することになる。

シャリーアが定めているのは、以上のとおりである。さて、この定めが「聖なるブハラ」において、すなわち中央アジアの宗教

的中心地であることによりつねに「聖なる」という形容詞とともに呼ばれたブハラにおいて、実際にどのように適用されていたのか見てみることにしよう。当時、ウラマーの間の凡庸な「算術家」たちは、イスラーム太陰暦の一年のうち六ヶ月を三〇日の月、残りの六ヶ月を二九日の月と数え、つねにラマザン月を三〇日の月と見なして「某日にラマザン月が始まる」と予め算定していた。

この算定にしたがい、毎年、予定日の前日の夜にムフティータチ、カーズイー・カラーン、ブハラ市のライースが、日没の礼拝頃にレーギスターンのパーヤンダ・モスクの門前に集まり、ライースの代理人は自分が買収した二―三人の偽の証人をミリー・アラブ・マドラサの屋上に連れていった。証人たちはそこから、曇つていようと晴れていようと日が沈んだとたんに「新月を見て」、新月を確認したことを証言するためにレーギスターンに急ぐのである。

そのときまでにウラマーやカーズイー・カラーンは日没の礼拝を済ませ、「新月の目撃者」の証言を受ける用意をして待っていた。ライースの代理人が「誠実な証言者」をカーズイー・カラーンの面前に連れ出し、「彼らはラマザン月の新月を確認し、カーズイー・カラーン閣下の面前で証言いたしたいと申し出ております」と言いながらかしまると、カーズイー・カラーンは、シャリーアによつて証言者が知らなければならぬと定められている宗教的知識やその他のことについて彼らに尋ねた。彼らも、一五―二〇年も前からこの職（虚偽の証言をすること）を得るために準備し、毎年カーズイー・カラーンの前で繰り返してきた答えを返した。

その質問のあと、カーズイー・カラーンは彼らに証言することをうながし、彼らの誰もが自分の順番が来ると以下のように証言した。「偽善のためではなく、神の名において証言いたします。西の方角、太陽が沈むとき、一方の端を上、一方の端を下に斜めに傾いた弓のような形の新月を確認いたしました。」

カーズイー・カラーンは、ムフテイーたちにこの証言がシャリーアに照らして受け入れられるものかどうか尋ね、ムフテイーたちがうなずきながらこの証言が受け入れられるものであることを認めると、カーズイー・カラーンは翌日がラマザンであると正式に発表するよう命じた。

ライースの代理人は、この命令を聞くとアルクの城門の前に行き、ナカーラ奏者たち¹²に合図した。アルクの城門の上層のナカーラ・ハーナ¹³では、ナカーラ奏者たちがナカーラを火であぶって皮の張りを良くし、ばちを手にとって待ちかまえており、彼らは合図を受けるといっせいにナカーラを叩き始め、一時に一〇—二台のナカーラと大瓶のような大太鼓がならされた。

これにより町の人々は、翌日からラマザンが始まることを正式に知ったのである。ライースの代理人は、「誠実な証言」をおこなった者たちに「仕事」の報酬として二タンガを与え、感謝とともに彼らを解放した。

以上のような証人の証言とその認定の手続きが偽りで嘘であることについて、当時のブハラ市民の間では有名な笑い話¹⁴が知られていた。笑い話といっても、それはある話上手な人が創作したものではなく、実際にあった話である。ブハラのカーズイー・カラーンの一人、ダームツラー・アブドゥシクル¹⁵は、シャリーアのごまかしや偽善をあからさまに指摘することをいとわな

物であった。彼はあるとき、潤んで充血し、ほとんど使い物にならないような目をした証言者の一人の老人に尋ねた。「ご老人！ あなたより若くて、まだ目のかすんでいない我々は、ミリー・アラブ・マドラサの屋上より高いアルクの屋根に登って、いくら目を凝らしてみても新月を確認することができませんでした。あなたはそのようなご老体で、目もかすんでしまつて、どのように新月が見えたのですか？」老いはれた証言者が答えて曰く、「私は一五年も二〇年も、毎年新月を見てきて慣れています。目をつぶつていてもさえ、私の目には新月がまるで満月のようにくつきりと見えるのですよ。」

* * *

当時、ラマザン月の夜は、すべての商店、キャラヴァンサライ、あるいはサモワールハーナ、食堂、床屋が夜中まで店を開けていた。人々は、日用食料品以外の買い物¹⁶を夜間におこなった。

バザールやチャイハーナでは芸人が歌を歌い、あるところでは辻語り¹⁷がなされた。このような夜間の行いは、総じて「夜のバザール」と呼ばれていた。

人々は、用事があるうと無かうと、連れだつて通りを徘徊した。町の徘徊は、夜のバザールが終わった後、夜中を過ぎても禁じられてはいなかった。その頃のブハラでは、一年のうち一ヶ月は夜の礼拝、つまり日没の一時半後から夜明け前のアザン「礼拝の呼びかけ」、つまり夜明けの一時半前まで公

式には外出が禁じられており、人々は家の中でじっとしていることを命じられていた。したがって、人々はこの自由な徘徊をまたとない機会、貴重な恩恵と見なし、大半の人々は用事があるとう無かるうと通りを徘徊したのである。

多くの街区のモスクでは、コーランの朗誦が始められた。通りを歩いている人々は、そのようなところにも首を突っ込んで見物した。若く声の良いカーリーがいるモスクには、「コーランの聴衆」が多く集まった。若いカーリーがコーランを朗誦している際には、聴衆たちは次のような詩句を互いにつぶやきあつたものである。

コーランを詠む汝の魅力的な声を聞くことは、
なんと良いことか。

汝の顔を見ることは、神の声を聞くことである。

一部の人々は、とくに夜のバザールが終わったあと、友人の家に集まって宴を催し歌を歌い、賭け事やその他の遊びをして夜を過ごした。

ラマザン月の間は、公式にはプハラのすべての人々が断食をしていることになっていた。断食をしているムスリムの食欲を刺激しないように、また断食に悪影響を与えないように、ユダヤ教徒がムスリムの面前でものを食べることさえも禁じられていた。断食をしていない者たちも、人々の前ではあくびをしたり、体の無気力感や断食の大変さについて嘆いたりして、さも断食をしているように見せかけていた。

本当に断食をしている人も、ごまかしている人も、ほとんどの

人々は夜が明けきる頃まで起きていて、朝食を食べてから眠りについた。この眠りは昼の一二時から二時頃まで続いた。起床後、顔を洗ってから外出し、商店主や商人はそれぞれの店や仕事場を開けた。

しかし、食料品を売るバザールを除いて、昼間のバザールはそれほど賑わいを見せず、商人たちが店を開けるのも時間つぶしのためだけであつた。したがって、店主たちは午後の礼拝の前には店を閉め、その後はラビ・ハウズイ・ディーヴァーンベギーに行つた。仕事もなくぶらぶらしている人はといえば、起床とともに通りを一巡りし、まっすぐそこを目指したものであつた。

ラビ・ハウズイ・ディーヴァーンベギーに集まった群衆は、マッダーフや手品師の人ばかり、あるいは辻語りの聴衆の輪に加わり、あちこちを行ったり来たりしていた。

プハラのライースも、昼間の巡回の際にラビ・ハウズイ・ディーヴァーンベギーを訪れた。ライースはハーンカーの脇の入り口のテラスに座り、彼の役人たちはそのあたりに散らばつた。役人たちは、路上生活者である者は「断食を破つた者」、ある者は「博打打ち」と言つて、あるいは別の罪をなすりつけて逮捕したのである。

ライースは、彼らのそれぞれの罪状を「吟味」し、ある者には三九回の笞打ち、ある者には一五回あるいは九回の笞打ちを命じた。ライースの役人たちは、刑を宣告された者の背中を裸にし、一人の役人がその「罪人」を背負つて立つと、笞打ち人が革の笞でライースが命じた数だけ罪人の背中を打つた。そして、笞打ち人と彼を背負つていた役人は、罪人から取れるだけ

の「奉仕の報酬」を取り立てた。実際、彼らがこの哀れな者になした奉仕とは、彼を捕まえて笞打ちにしたということであつたのにもかかわらずである。

ライースがラビ・ハウズイ・ディーヴァーンベギーに集まつた断食をしている者たちに対しておこなつたことは、ラマザン月以外にはあまりお目にかかることのできない「とてもおもしろい」見せ物であつた。ライースは、ラマザン月以外の時は、週に一度、木曜日にラビ・ハウズイ・ディーヴァーンベギーを訪れ、その度に一人か二人の者を笞打ちにした。しかし、ラマザン月には毎日訪れ、その度ごとに一〇—十二人の者を笞打ちの刑に処したのである。

ライースがおこなつたこのような処罰が、人々にどのような感情をもたらしただかについては、ブハラ革命の後に起つたある出来事がよく物語っている。(時系列的には、その出来事について語る場所はここではないかもしれない。しかし、その事件はラマザン月のライースやその役人たちの行いに関連あることなので、ここでそれについて言及するのがふさわしいように思える。)

ブハラ革命後のある年、私はラマザン月にブハラに滞在していた。まだラマザン月のラビ・ハウズイ・ディーヴァーンベギーの賑わいは続いており、ただ人々を処罰するライースやその役人たちがいないだけであつた。ある日の午後、私はディーヴァーンベグ・ハーンカーのテラスを歩いていた。アミール国時代にライースの笞打ち人であつたアラウッディーンという人物も、雑踏の中を歩いていた。九—一〇才ぐらいの一人の少年が、彼の前を彼に向かい合つて後ろ向きに歩きながら、「お役人さま、笞はどこへやつたの? なぜ、今は人々を笞打ちにしないの?」

今でも人々を笞打ちにしたらどうです? さあ、どのように笞打ちにするか見てみましょう!」と言つてこの人物をからつたので、人々は笑いだした。年端もいかなないこの少年のしたことは、ブハラのすべての人々の思いを代弁するものであつた。

ラビ・ハウズイ・ディーヴァーンベギーに集まつた人々とつてのもう一つの見物は、断食をごまかしている者同士のけんかであつた。断食をごまかしている者たちは、まるで水タバコかナースに酔っているかのように顔を真っ赤にして口げんかを始め、そのうち互いに襟首をつかんで殴り合いのけんかになつた。一部の純朴な老人たちは、彼らが本當に断食をしているものだと思ひ、彼らの間に割つて入つて二人を引き離し、彼らをなだめた。

「ラマザン月なんだから、けんかはやめなさい。断食をしている者は、水タバコやナースに酔つて狂人のようになるものだ。しかし、邪心を払つて互いの言いつ分を収め、けんかなどしてはいけない。というのも、互いにけんかすることで断食の功德が失われてしまうから。」

一つのけんかがまだ収まらないうちに、また別のところでもこのようなけんかや口論が始まつた。このように、これもまたラビ・ハウズイ・ディーヴァーンベギーに集まつた人々にとつては一つの見物であつたのである。

ブハラのラマザン月の場所取り合戦

ラマザン月の間、ブハラのマドラサの授業は完全に休みに
なった。その間、農村出身の貧しい学生たちは自分の村に帰り、
父親やあるいは親戚の農作業を手伝った。農作業を手伝えるよう
な親類がない年長の貧しい学生たちは、村に行つてイマームに
なった。イマームを勤めることにより空腹を満たし、この月の終
わりには村人たちから断食明けの喜捨を集め、生きるために必要
最低限の生活の糧を貯えて帰ってくるのである。

しかし、金持ちの学生とブハラ出身者、および農村につてもな
くイマームも勤めない貧しい学生たちは、マドラサに残った。夜
のバザールをぶらぶらしてゐる者たちや、「コーラン朗誦の見物人」
の多くは、このような何もすることのない金持ちの学生や貧しい
学生たちであった。このような学生たちは、毎日、起床すると何
人かで連れ立って（もちろん友達同士でグループを作った）ラ
ビ・ハウズイ・ディーヴァーンベギーに行き、礼拝用の敷物を広
げてその上に腰を下ろし、くだらない話やまじめな議論に花を咲
かせた。このようなグループには、マドラサの学生ではなかつた
けれども、グループで影響力を持つ学生やグループのメンバーの
多くに知り合いのいる一部のブハラ市民も参加した。

このようなグループが礼拝用の敷物を広げる場所は、床屋の屋
根の上であつた。当時、ディーヴァーンベグの貯水池の岸辺に
は、池の南西の角から北東の角まで池に面するように床屋が並ん
でおり、床屋の建物の後ろは、ディーヴァーンベグ・ハーンカー
のテラスや歩道に接していた。テラスや歩道は、池の岸の地面か
ら五―六段ほど高くなつていたので、床屋の屋根は、建物の裏側

から見るとテラスや歩道から一メートルほどの高さしかなく、
そこから屋根の上に上り下りができたのである。

「礼拝用の敷物に座る者たち」(もちろんこの表現は限定的な
用法で、モスクやハーンカーで礼拝する人々を意味するもので
はない)にとつて、床屋の屋根の上での一等地はハーンカーの
テラスに近い場所であつた。つまり、テラスに近ければ近いほ
ど良い場所だとされていたのである。したがつて、それぞれの
グループは、なるべくテラスに近い良い場所を「確保」しよう
と努力した。

幸いなことに、屋根の上の場所取りにかんしては、紙に書か
れた法律と同様の効力を持つ不文律が適用されていた。その暗
黙の了解によれば、あるグループがラマザンの最初から、あ
るいは前年のラマザンから確保している場所は、そのグルー
プのものとなされたのである。しかし、この不文律の適用に
は一つの条件があつた。その条件とは、どんなに遅くとも午後
三時までには自分たちの敷物を広げなければならぬというこ
とである。したがつて、それぞれのグループは仲間内から当番
を決め、交代で毎日三時までには自分たちの場所に敷物を広げた。
もしこのような不文律がなかったら、毎日良い場所の場所取り
をめぐる流石のけんかが起り、多くのけが人がでてもおか
しくはなかつたであらう。

それにもかかわらず、これらのグループの間では様々な理由
により争いが起り、しばしば流血の事態に至ることもあつた。
筆者も、ある時このような流血のけんかを目撃したことがある。
それぞれブハラのマッラーザード(26)の中でもごろつきとして知
られる人物が率いる、二つの学生グループがあつた。それらは、

お互い隣同士の場所で敷物を広げていた。

手前の場所に陣取ったグループのリーダーは、「石油ランプ」というあだ名を持つシャリーフ・マフドゥームという人物で、彼はブハラ出身のカーズイーの息子であった。彼の子分として、「休耕地のマフドゥーム」というあだ名のブハラ出身のムッラーザードがいた（彼の顔は、あばただらけで鋤返した休耕地のようにこぼこだったので、ブハラの人々は彼にこのようなあだ名を付けた。筆者も含めて多くの人々は彼の本当の名前を知らず、このあだ名で彼のことを呼んでいた）。

一方、奥の場所に陣取ったグループのリーダーは、マフムード・マフドゥームというムッラーザードで、彼は「エナメルのマフドゥーム」というあだ名で呼ばれていた（彼がこのようなあだ名で呼ばれた理由は、ロシアからエナメル革が入ってきたばかりの頃に彼がエナメル革で靴を作らせて履いていたことにある）。そして、「ハンサムなマフドゥーム」というあだ名のブハラ出身のムッラーザードが彼の子分であった（所々抜け落ちた「アフガンひげ」をはやし、ひどく醜い真っ赤なあばた面をしていたので、ブハラの人々は彼の醜さに掛けてこのようなあだ名を付けた）。

ラマザン月のある日、「石油ランプのマフドゥーム」のグループの当番が時間に遅れ、敷物を三時までには広げなかったの
で、その場所をずっと狙っていた「エナメルのマフドゥーム」のグループは、これを機会に自分たちの敷物をずらしてその場所を占領してしまつた。

すべての床屋の屋根が人々でいっぱいになる頃、「石油ランプのマフドゥーム」が自分のグループを引き連れてやってきた。彼

は、自分たちの場所が他のグループに占領されているのを見ると、仲間とともに屋根の上に飛び上がり、いきなり「略奪者」のグループに掴みかかった。何も知らずに安心して敷物の上にあぐらをかいて座っていた彼らは不意打ちを受け、「略奪者」のグループが事態を把握するまでに「石油ランプのマフドゥーム」のグループは、リーダーの「エナメルのマフドゥーム」とその子分の「ハンサムなマフドゥーム」を屋根の下の貯水池のほうに投げ飛ばしてしまつた。不意打ちを受けたグループの者たちは、事態を理解すると座っていた場所から立ち上がり、攻撃者たちの胸ぐらに掴みかかった。二つのグループの者たちは互いに殴り合い、相手の顔や喉に爪を立て、服を引き裂きあつた。取っ組み合った二人は、互いに相手を屋根から下の貯水池のほうに投げ飛ばそうとした。しかし、どちらもその目的は達せず、屋根の端までにじり寄つた二人は、一方が片足を屋根から滑らすともう一方はその相手を屋根からはじき出そうとしたが、屋根の端に残つた片足では体重を支えきれないと見た相手に引き込まれ、結局二人一緒にもんどり打つて屋根の下に落ちてしまつた。

これを見て、それぞれのグループの者たちは、屋根の上と屋根の下との間でけんかを続けようとした。しかし、怒りで完全に頭に血が上り暴徒と化した彼らは、殴り合いのけんかではなく、武器を手にとつて相手をこてんぱんに打ち負かそうという考えに至り、武器を求めて迎りを見回し始めた。

床屋の裏手には、靴の修理屋が列をなしていた。彼らは、テラスの上の腰掛けに座つて縫い目のほつれた履き物を縫い直していたが、けんかが始まると仕事の手を休め、立ち上がつて

んかを見物し始めた。一人の職人の手には、靴の修理用の叩き棒が握られていた。武器を求めていた学生の一人は、この叩き棒を見ると、職人の手からそれを奪い取り、その叩き棒で「石油ランプのマフドウム」の頭を殴った。彼の頭はぱっくりと割れ、彼は敷物の上に倒れ込んでしまった。これを見た双方のグループの者たちは、それぞれ靴の修理屋のほうに走り寄り、彼らからある者は叩き棒を、またある者は金槌、ペンチ、長靴の型木などを奪い取り、けんかが続けた。

見物人の群衆は、けんかをしている者たちの周りを取り囲んでいたが、誰もその間に割って入って凶暴な狼のような彼らを引き離し、けんかをやめさせようとはしなかった。というのも、最初はけんかを止めようと間に割って入る者もいたが、双方から殴られ、あきらめて退散していたからである。その後、間に割って入ろうとする者があると、周りの者たちは「ロバの肉と犬の牙」と言うじゃないか。これは、どうしようもないよ。この犬どもは、互いの肉をロバの肉の代わりに『ごちそうさま』するんだから、そのままやらせておけよ」と叫んだ。

結局、大きな混乱の時に秩序維持を担当するカーズイー・カラインとコシユベギの役人が、現場に駆けつけた。この頃には、双方のグループの大多数の者は負傷して地面に倒れており、けんかが続いている者たちも頭や顔から血を流していた。

役人たちは、けんかが続いている者たちを取り押さえて相手から引き離し、荷車を呼んで重傷者を病院に搬送し、けがの軽い者たちを裁判所に拘留するために引っ張っていった。

以上が、「聖なる」ブハラ「神聖なるラマザン月」の状況であった。

* * *

もちろん、上に述べたようなブハラ「ラマザン月」の様子は、この町の住民の労働者層とは関係のないことであり、ラマザン月に苦勞していたのはこれらの人々であった。たとえば、水運搬人を例に取ってみよう。水運搬人たちは、夜明けから夕暮れまでバケツ七八杯分の水が入った革袋を肩に担ぎ、得意先の家々に一〇〇〇—二〇〇〇歩も歩いて届けて回った。さらに、彼らはクカルタシユ、ディーヴァーンベグ、ミーリ・アラブなどの大きなマドラサの二階にも、四〇—五〇段の階段を上がって水を運んだのである。

ラマザン月以外の時でもこの作業はとてもきついものであったが、彼らは仕事の合間にひとかけらのパンを口にし、一杯の茶を飲んでしばしの休息をとるだけで仕事を続けた。しかし、ラマザン月には、一四—一六時間も何も食わずにこのような労働を続けることとなり、ほとんど耐えられるようなものではなかった。それに加えて、ラマザン月にはごちそうを振る舞うために家々の水の消費量が多くなり、水運搬人へのさらなる負担となった。

このように、彼らは日没頃に疲れ切って家に帰り着き、妻が作ってくれた肉なしの粗末な食事と水だけで空腹を満たし、このような食事を翌日の仕事の活力としなければならなかった。夕食後、疲れ切った状態のまま床に就くことは、さらに彼らを意気消沈させた。そして、夜明け前には起床し、長い昼間の

空腹感を恐れて望むと望まざるとにかかわらず食べ物を口の中に放り込み、夜明け頃に仕事に出ていったのである。

一部の年老いた水運搬人たち、あるいは中年の者でさえも、ラマザーンの最初の一〇日間でもとても疲労し、この月の一五日頃には仕事ができなくなって寝たきりになってしまった。

靴職人の状況も、これと似たようなものであった。給料の前借りのために仕事場に拘束された彼らは、ラマザーン月以外の時に一日一二時間働くとするれば、ラマザーン月には一六時間働いていた。というのも、親方たちはラマザーン月に際して祭日用の注文を多く受けたからである。祭日用の注文は、普段の注文よりも値段が高かったのにもかかわらず、職人たちへの給料はそれまでと変わらない額であった。

職人たちは、日没の礼拝時まで仕事を続けることを余儀なくされ、イフタル³時に何かしら食事を取り、ふたたび夜明け前の食事まで仕事を続けた。気の進まない夜明け前の食事を取ったあと、むりやり食べた満腹感とともに床に就いた。しかし、数時間の睡眠ののち、親方がやってきて皆をたたき起こし、職人たちを仕事にとりかからせた。親方は、その後、自分の部屋に戻って夕方までぐっすりとしたのである。

靴職人たちは、ラマザーンの最後の一〇日間には、一日二〇時間働くことさえもあった。断食明けの祭日が近づき、お客からの注文の催促が厳しくなるからである。親方も、自分の職人たちに對してより多くの仕事をこなすよう強いた。

彼らは、ラマザーンの最後の三日間は、注文をさばくため断食明けの祭日の朝までほとんど不眠不休で仕事をした。したがって、多くの若い靴職人も、ラマザーン月の中頃には、あるいはど

んなに耐えられたとしても断食明けの祭日には病に倒れてしまった。

自分の家で「自由に」仕事をしていた個人営業の靴職人も、このような心配とは無縁ではなかった。一方では、ラマザーン月と断食明けの祭日に際して、職人から製品を買い上げる仲買人が職人たちに多くの仕事をこなすよう強要し、また一方では職人たち自身も、ラマザーン月の多くの出費をまかなうために実入りの良い臨時注文を多く受ける必要があったからである。ラマザーン月には、毎日イフタルの食事のために、最低でもゴマ入りのパン、どんぶり一杯のニシヤツラー³とアービ・ナバート³を買って家族の前に出さなければならぬし、断食明けの祭日までには妻や子どもたちのために新しい服を作ってやらなければならなかった。

他の職人たちの状況、たとえば織物職人たちの状況もこのようなものであった。左官や大工、絵付師⁴の状況も、ラマザーン月には厳しかった。というのも、この月には建物の建築が完全に休みになり、彼らはラマザーン月の出費を翌月の給料から前借りすることでやりくりしなければならなかったからである。

誰よりも状況が厳しかったのは、日雇人夫であった。普段は、貧しい土地なし農民や町の路上生活者が毎日レーギスターンに集まり、人夫を必要とする者が彼らを日雇で雇って肉体労働に従事させた。しかし、建築業やその他の肉体労働が休みとなるラマザーン月には、日雇人夫たちは仕事にあぶれてしまったのである。

まれに日雇人夫の需要があったとしても、一人か二三人の人夫が食事なしの半日仕事で雇われるぐらいであった。彼らが

受け取る半日分の賃金では、自分が食べる一日分のパン代にも満たず、妻や子どもたちの空腹を満たすことはできなかった。このように、手を動かさない限りは食べられない日雇人夫にとって、ラマザン月の失業は大変な災難であった。

建築に関わりのある漆喰製造業や日干レンガ職人にとつても、状況は日雇人夫と似たようなものであった。日干レンガ職人にとつては、仕事の無い一ヶ月分の荷運び用口バの餌代は余計な出費となった。

当時の詩人の一人が、このような労働者層のラマザン月の状況に着目し、以下のような詩を詠んでいる。

私は、ラマザンを病氣 [marazan] と読む。
すなわち、私は昼間は病気で、夜はさらに具合が悪い。

この簡潔な一対句は、労働者層の状況を的確に代弁するものであった。

訳注

1 すべてのムスリム(イスラーム教徒)は、ラマザン月(イスラーム太陰暦九月)の一ヶ月間、夜明けから日没まで断食することが義務づけられている。ただし、病人、妊婦、老人、子供、旅人などは断食しなくてもよい。

2 ラマザン月の夜におこなわれる特別の礼拝。Farhangi zabāni tajiki, jidi II, Moskva, 1969.

3 イスラーム神秘主義者の修道場。

4 シャイフとはイスラーム神秘主義の導師のことで、その指導を受ける弟子たちはムリードと呼ばれる。

5 ラマザン明けの祭日。

6 イスラーム諸学問を修めた者。

7 高位のウラマーのうち、とくにイスラーム法学やハディース(預言者ムハンマドの言行にかんする伝承)に精通しているとされる者。フハラ市には一四人のムフティー職があり、彼らはファトウマー(教令)を出す権限を持っていた。Kislyakov N. A., *Parikhah'i no-feodal'nye otnosheniya sredi osedlogo sel'skogo naseleeniya Bukharskogo khansva v konse XIX - nachale XX veka*, Trudy Instituta etnografii, Novaya seriya, Tom LXXIV, Moskva-Leningrad, 1962, p. 48.

8 大カーズィー。フハラ市の司法部門の最高責任者。

9 住民の風紀、すなわち人々がシャリーアに反した行いをしていないかどうか監督する役職。また、市場の秩序維持、度量衡のごまかしにひそひそ監督した。Kislyakov N. A., *Parikhah'i no-feodal'nye otnosheniya...*, pp. 48-49.

10 フハラの王城「アルク」の城門前の広場は、レーギスタン(字義「おおりには「砂場」の意」と呼ばれる。そこでは市が立ち、フハラ町の商業の中心であった。二〇世紀初頭には、レーギスタンを囲むように七つのマドラサやモスクが建っていたが、それらはソ連時代に破壊された。Rempel' L. I., *Dalekoe i blizko. Bukharskie zapisi. Sranitsy zhizni, byta, stroitel'nogo dela, remesia i isskustva Staroi Bukhary, Tashkent, 1981*, pp. 112-115.

11 一五三三〜六六年にShaykh Miri Arabi Yamaniによって建立。フハラでも規模が大きく、権威あるマドラサの一つであり、アイニーがこのマドラサに住んでいた一八九〇年頃には三〇〇人以上の学生がいた。Pamyatniki isskustva Sovetskogo Soyuza. *Srednyaya Aziya. Spravochnik-puevoditel'*, Avtor teksta i sostavitel' al' boma: G. A. Pugachenkova, Moskva, 1983, p. 364; Ayni S., *Yaddashihā*, Kuliyā, jidi 6, Dushanbē, 1962, p. 220. 素焼やびびった壺状の胴に皮を張った片面太鼓。はちで叩いて演奏

- し、音が大きいことから屋外で演奏される。
- 13 アルクの城門の三層目、レーギスターンに面したバルコニー。ここにナカーラ奏者、スルナイ(チャルメラ系の笛)奏者、カルナイ(ラッパ)奏者が並び、式楽を演奏した。Andreev M. S., Chekhovich O. D., Ark (krent') Bukhary v konse XIX-nachale XX vv, Dushanbe, 1972, pp. 26-28.
- 14 プハラの銀貨。一九〇一年に決められた法定為替レートは「一タンガ＝一五ロペイカ。Masal'ski V. I., Turkestanski krai, S. Peterburg, 1913, p. 54.
- 15 一九世紀後半の優秀なウラマーの一人として知られる人物。一八一六年生まれ一八八九年没。マドラサの教授として教育に携わっていたが、当初ライース職、後にカーズイー・カラーン職に就任(一八七九—一八九年)。筆名(yal. アイニーを保護したシャリーフジャン・マフドウム(一八六七—一九三二、筆名Ziya)は、その息子。ウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所蔵写本1304, ff. 103b-113b.
- 16 サモワールで湯を沸かし、お茶用の湯を売り、またお茶も出す店。各家庭からサモワールハナに湯を買いに来ることもあった。中央アジアの他の諸都市と違って、プハラでは人々が茶屋でくつろぐ習慣がなかった。バザールなどにある軽食も出すチャライハナは、プハラ住民ではなく外来者が多く利用した。Sukhareva O. A., Kvarital'naya obshchina pozdnefeodal'nogo goroda Bukhary, Moskva, 1976, p. 23.
- 17 特別の訓練を受けたコーラン朗唱を専門とする職。
- 18 プハラには、様々な時代にイラン方面から移住してきたユダヤ人が住んでいる。一説には、彼らは六世紀にはすでにプハラに来ていたといいい、二〇世紀初頭には三つのユダヤ人街区に集住していた。一九二六年の調査では、人口三三二—四一人。母語はタジク語。彼らの多くは手工業と商売に従事していた。アミール政府は一二歳以上の男子から人头税(ジスヤ)を徴収し、それと引き替えてユダヤ人社会に干渉せず、彼らは宗教活動も自由におこなうことができた。Sukhareva O. A., Bukhara. XIX-nachalo XX v. (Pozdnefeodal'nyi gorod i ego naselenie), Moskva, 1966, pp. 166-173.
- 19 プハラの町の盛り場の一つ。その中心にディーヴァーンベグの貯水池(一六二〇年造営)という方形の池(ハウズ)があるので、ラビ・ハウズ(池のほとり)と呼ばれる。その池を取り囲むように、東側にはナーディル・ディーヴァーンベグ・マドラサ(一六二二年)、西側にはナーディル・ディーヴァーンベグ・ハーンカー(一六二〇年)、北側にはプハラ最大のクカルタシユ・マドラサ(一五六八/九年)が建っていた。Aymi S., Yaddashha, Kulliyat, jildi 7, Dushanbe, 1962, pp. 621-622.
- 20 イスラームの偉人伝や宗教史上の諸事件など、おもに宗教的な内容の話を語る辻語り。プハラのマッターフたちは職能集団を結成し、みな「マッターフの街区」(Guzari ma'dafan)と呼ばれる一つの街区に集住していた。彼らは三十四人で一組となり、人が多く集まるバザールなどの盛り場に出かけて辻語りをおこなった。恋愛にかんする内容の歌や叙事詩、サアディーやハーフィズ、ナヴァーイーなど古典詩人の詩を歌うこともあった。Rempel' L. I., Dalekoe i blizkoe... p. 66; Sukhareva O. A., Kvarital'naya obshchina... p. 232.
- 21 プハラの革命勢力と協力したフルンゼ指揮下の赤軍は、プハラ市に軍事攻撃をおこない、一九二〇年九月二日プハラのアミール政権は崩壊した。これにより、マンギト朝最後のアミール、アーリム・ハーン(在位一九一〇—二〇年)はアフガニスタンに敗走し、一〇月には「プハラ人民ソヴィエト共和国」が成立した。ソ連時代の歴史学では、プハラ革命はプハラ人民による「人民革命」とされていたが、最近の研究では実質的にはソヴィエト・ロシアによるプハラ併合であったことが明らかにされている。小松久男『革命の中央アジア——あるジャディードの肖像』東京大学出版会、一九九六年、一九一—二〇三頁。
- 22 一九二一年以降、アイニーはプハラを離れ、以後ずっとサマルカンドに住んでいた。
- 23 中央アジア特有の嘔みタバコ。
- 24 モスクにおける礼拝の際の指導者職。
- 25 jaynamaznshinan
- 26 マドラサで勉学を修めた者(ムッラー、またはウラマー)の子弟。

- 27 中央アジアでは、マドラスで勉学を修めた者の子弟のことをマン
ドゥームという。ムッラーザータに同じ。Ayni S., *Lughati nimatqislii tajiki*
barai zabani adabii tajik, Kuliyat, jildi 12, Dushanbe, 1976.
- 28 悪い人間同士が敵対し、いがみ合っている様を言う諺。Ayni S., *Lughati*
nimatqislii tajiki.
- 29 プハラの大宰相。
- 30 かつてプハラ市内には一〇〇以上の貯水池があり、家庭で使う生活用
水は専門の水運搬人が貯水池から革袋に汲んで各家庭に届けた。
Rempel' L. I., *Dalekoe i blizkoe...*, pp. 143-148.
- 31 日没後、その日の断食を終えて最初に食べ物をお口にすること。Ayni S.,
Lughati nimatqislii tajiki.
- 32 卵白と砂糖、およびある種の植物の根を混ぜてメレンゲ状に泡立てて
作った菓子。Ayni S., *Lughati nimatqislii tajiki*.
- 33 水菓子の一種。Ayni S., *Lughati nimatqislii tajiki*.
- 34 プハラでは、室内装飾として建物内部の漆喰の壁や梁に絵を描き、絵
付けを専門とする職人がいた。Rempel' L. I., *Dalekoe i blizkoe...*, p. 199.

